

# 儒教 と 経 済

MINEO NAKAJIMA  
中嶋 嶺雄  
東京外国語大学教授

## 1.

1980年代初頭、日本をはじめ台湾、韓国、香港、シンガポールといったアジアの新興工業諸国(NICS)の経済発展が注目された時、友人のアメリカ人学者が私に、「これからはポスト・コンヒューシャス・イーラ(Post Confucious Era)だ」と語ったことがあった。“儒教後の時代”とでも訳せるだろうか。儒教文化を通過した国々の経済が非常に発展しており、これからはそのような国々の時代だと言うのである。

確かに日本やアジアNICS諸国は、いずれも〈儒教文化圏〉に属しており、ある意味では中国文化の影響を全面的に受けている地域である。したがって、この地域を漢字文化圏といっても良いだろうし、もっと噛み砕いていえば、食事の時に箸を持つ文化を共有している地域だといっても良いだろう。そして、これらの〈儒教文化圏〉諸国の経済発展が最近は特に著しく、21世紀へ向けて、世界経済の推進力になっていくものと思われる。

一方、アジアの〈儒教文化圏〉には、中国はもとよりベトナム、北朝鮮などの社会主義国もある。しかし、経済発展ということから考えると中国や

北朝鮮、ベトナムなどの社会主義国家は、いかに〈儒教文化圏〉だといっても工業化、近代化がまだ十分に達成されていない。このことは逆説的に、いかに〈儒教文化圏〉諸国の経済的、社会的発展が著しいにせよ、社会主義のシステムをとる限り、後発諸国の近代化はなかなか成功しないことを物語っている。

こうした状況の中で、アジアNICS諸国が、見事な経済発展と、優れた経済的パフォーマンスを示している現実が、欧米の学者をして〈儒教文化圏〉という、一つの文明圏に注目させたのだ。いわば、後発型非西欧文化圏の発展プロセスとして、〈儒教文化圏〉モデルがあるのではないかという論議が最近起って来たのである。こうして、後発非西欧社会の近代化という問題を考えた時に、従来の近代化論は、〈儒教文化圏〉諸国の見事な成功によって、大きな挑戦を受けているといえるのである。

## 2.

マルクス主義は、そもそも成熟した資本主義社会が社会主義社会に移行することによって人間性を全面的に開花し、さらに進んだ近代社会を形成

するのだという、夢多き近代化論の一つであった。しかし今日、社会主義にバラ色の未来を託すことは、もはやできなくなってしまった。それどころか、ソ連や中国に見られるように、内部的な社会主義離れ、つまり西欧化、西側化が社会主義国でいよいよ始まっていくプロセスがある。これこそが将来の時代状況であり、マルクス主義あるいは社会主義や計画経済が、もはや近代化のモデルではなくなってしまったことは明白であろう。

ところで近代化のモデルとしては、もっと整然とした理論があった。マックス・ウェーバーの考え方がそれである。ウェーバー・モデルの近代化とは、彼の著書「プロテスタンティズムの論理と資本主義の精神」(邦訳：岩波文庫、1955、1962)が語っているように、プロテスタンティズムに象徴される禁欲主義と勤労意欲を中核価値とした西欧社会においてこそ近代化、工業化が達成できるというものである。彼のもう一つの著書「儒教と道教」(邦訳：創文社、1971)は、中国社会の特質を鋭くえぐり出した名著であるが、儒教文化と経済発展といった視野はまったくなく、ピューリタニズム、つまり欧米のプロテスタンティズムの社会こそ、近代化・工業化の成功のモデルであると考へたものである。

ところが現実には、ウェーバーの予測をはるかに超えて、〈儒教文化圏〉諸国が80年代から21世紀にかけて大きな可能性を示し始めた。そして一方、西欧的な合理主義にのって近代化を遂げたヨーロッパは、今や著しい経済的停滞に陥っている。またアメリカも、東部エスタブリッシュメントといわれたプロテスタントの上流階級を中心とする社会が解体しつつある。WASP(ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント)といわれたアメリカ的な中核価値は、もはや崩壊しつつあり、今後はむしろアジア人が多く、〈儒教文化圏〉的な色彩が強いカリフォルニアを中心とした西海岸、つまり太平洋地域の発展が、アメリカの新しい世紀を担ってゆくであろう。

### 3.

もとより〈儒教文化圏〉といっても、各国によって様々な違いがある。同じ儒教的な論理をどのように受け止めるかについても、国民性による違いがある。森島通夫教授(ロンドン大学)は「なぜ日本は『成功』したか?」(TBSブリタニカ、1984)の中で、やはり儒教文化の問題に着目し、「中国は文治儒教国であるが、日本は武治儒教国といわねばならない」と語っている。また、中国儒教がヒューマニスティックであるのに対し、日本儒教は著しくナショナリストティックである、とも書いている。

中国と日本とは、社会制度の根本がそもそも大きく違っているのだから、同じ儒教の教義も異なった社会的・精神的風土で受容されてきたことを忘れてはならない。中国の封建制は、紀元前の

周の時代に終わっている。わが国のように、鎌倉時代から明治維新に至るまでの長い間、封建制社会を持っていた国家とは根本的に違う。その点で、日本の封建制は身分制度や土地所有形態を含めて、むしろヨーロッパの封建制と非常によく似ている。

私がしばしば指摘するように、同じ仏教寺院でも、日本の寺が武士の文化の色彩を強く持つ男性美であるのに対し、泥と石でできた中国の寺は女性美である。これは武家文化、武家政治を持たないマンダリン的、つまり中国特有の文人官僚的な支配の象徴ではないのか。この点が日中間の美意識の違いにもかかわってくるのだ。(この点について詳しくは拙著「文明の再創造を目指す中国」(筑摩書房、1984)および「日本人と中国人 ここが大違い」(ネスコ・ブックス、1986)参照)。

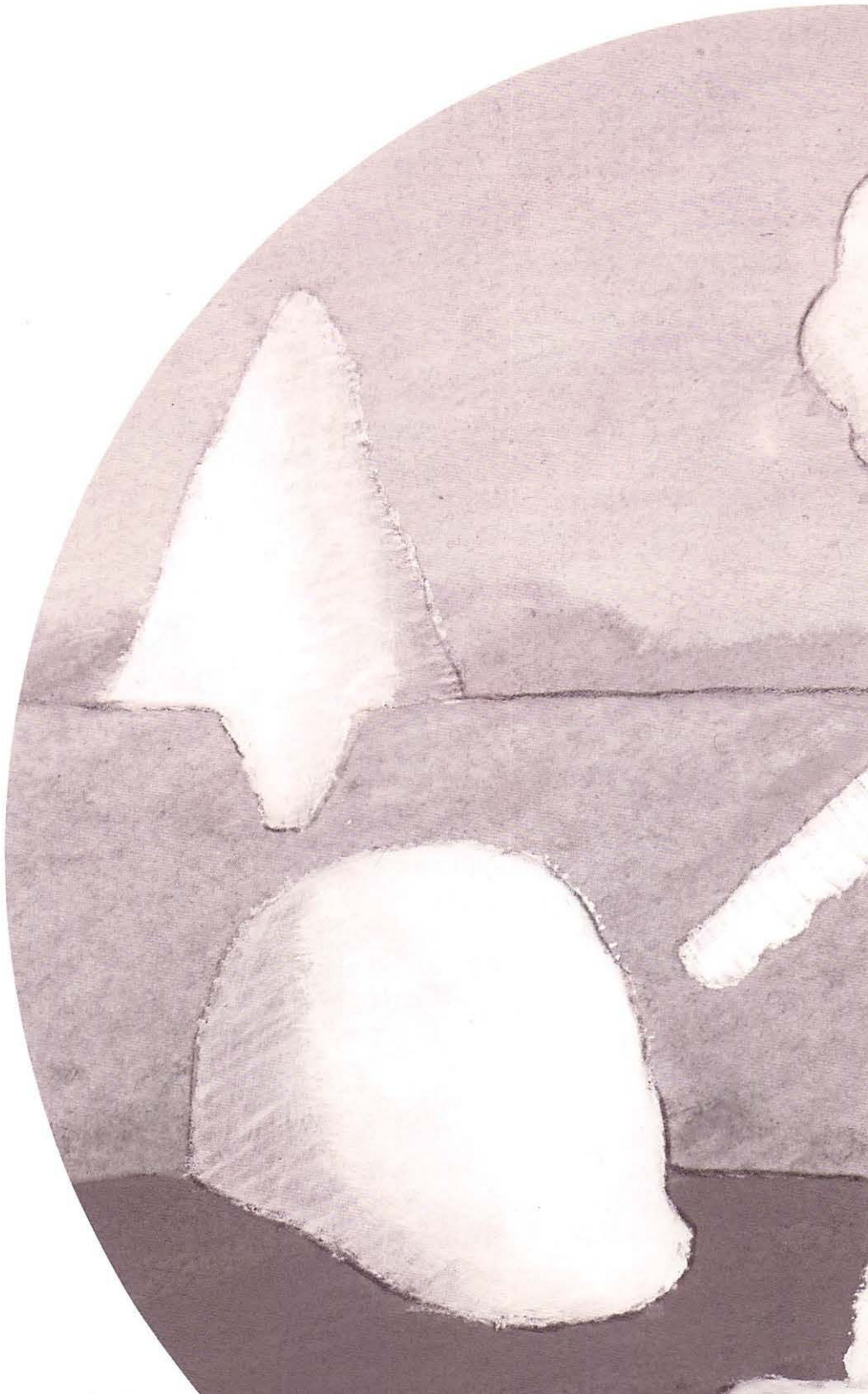
また、「仁」「義」「礼」「知」「信」とか、「忠」「孝」といった儒教の徳目をとってみても、中国と日本、あるいは韓国などで、それぞれ違う解釈があり、重点の置き方も異なっている。例えば、中国人が「礼」を最も重んずる国民だとすれば、日本人は「義」を、韓国人は「孝」を重んずる国民だといえることができる。

### 4.

お互いにこのような違いがありながらも全体としてみて、〈儒教文化圏〉諸国は今、大きく発展している。この現実には、やはり注目せざるを得ず、したがって儒教と経済の関係を様々な角度から再検討することが迫られているのだといえよう。〈儒教文化圏〉の特徴に注目した最近の著書としては、金日坤著「儒教文化圏の秩序と経済」(名古屋大学出版会、1984)が優れている。韓国人学者の金教授は、その中で「儒教文化の一番大きな特徴は、家族集団主義による社会秩序にあると思われる」と述べている。これはなかなかユニークな指摘であり、儒教的論理と結びついた集団主義が〈儒教文化圏〉諸国の経済発展の重要な支えになっているといえることができる。このような家族集団主義が経済運営のための一つの規範になっていることは、今日のわが国大企業に見られるばかりか、三井、住友など、日本の財閥を形成するに至った江戸の大町人の系譜をたどっても明らかであろう。

儒教文化の第2の特徴は学習主義、あるいは学習集団、学習国家ということである。わが国の学問も儒教の影響がきわめて強く、特に朱子学のような新しい教義解釈の儒学流派が、日本の近代化に対して大きな意味を持ったことはよく知られている。中国においても、科擧の試験をはじめとして、儒教文化が徹底的に学習されてきた。この場合、これら諸国に共通する漢字学習の持つ教育的・社会的効果が大いに重視されて良いように思われる。学習主義、学習集団、学習国家的な志向は、そもそも儒教の教典「論語」の巻頭が「学びて時





に之を習う」という〈学而篇〉から成っていることに端を発しているといえようが、結果的には中国大陸を別とした今日のアジア〈儒教文化圏〉諸国の教育水準の高さ、識字率の高さ、つまり文盲率の低さにつながっている。この点が近代化、工業化のためのノウハウの開発、インフラストラクチャーや情報ネットワークの整備などに大きな意味を持っていることはいうまでもない。

儒教文化の第3の特徴は、一種の論理的な行動規範を持っていることである。「仁」「義」「信」などの徳目を取ってもよいが、ここではさしあたり「信」で論理的行動規範を代表させてもいだろう。このような規範は、日本社会のあらゆる分野

におけるサービスの良さやアフタケアの良さとなって現に効果を示している。

ところで、そもそも儒教は信仰の対象であるよりは、一つの論理的規範であった。厳密な宗教ではないがゆえに、例えば日本では神道との共存が可能なのであり、中国では道教との共存が可能なのである。つまり儒教は、きわめて寛容なドクトリンなのであって、信仰であるよりは社会的な規範であり、道徳律であるところに特徴がある。こうした儒教のゆるやかな論理行動規範が、上に見た儒教文化のいくつかの特徴と結びついて、一種の実学的精神と経験主義を導き、工業化・産業化社会の基盤整備に大いに役立ってきたのではない



イラストレーション/早川良雄

かと思われる。「修身齊家治國平天下」というスローガンや「經世濟民」という言葉に見られるように、儒教の教義は近代化と經濟發展にとって重要な精神的支柱になってきたともいえよう。

もちろん、儒教文化とか〈儒教文化圏〉といっただけで社会や經濟の發展のすべてを規定することはできない。工業化や近代化を成功に導いた要因については、わが国の場合、儒教文化を近代化のための〈ネガ〉として保持しながら、〈ポジ〉としては近代ヨーロッパ社会のエートスや精神文化、科学技術を全面的に受容したこと。アメリカの産業文明に大きな影響を受けたことなど、もっと多面的に論じられねばならない。私自身が研究代表

者となって、本年度から3年間の予定で始まる文部省科学研究費重点領域研究「東アジアの經濟的・社会的發展と近代化に関する比較研究」は、そのための大型研究プロジェクトである。東アジアの工業化、近代化といっても、様々な角度から個別的な分析と検討を加えてみなければならぬのであるが、しかし、經濟發展という歴史的課題の共通項として〈儒教文化圏〉が注目され始めていること自体、人文・社会科学にとって、まったく新しい問題提起だといわざるを得ないだろう。



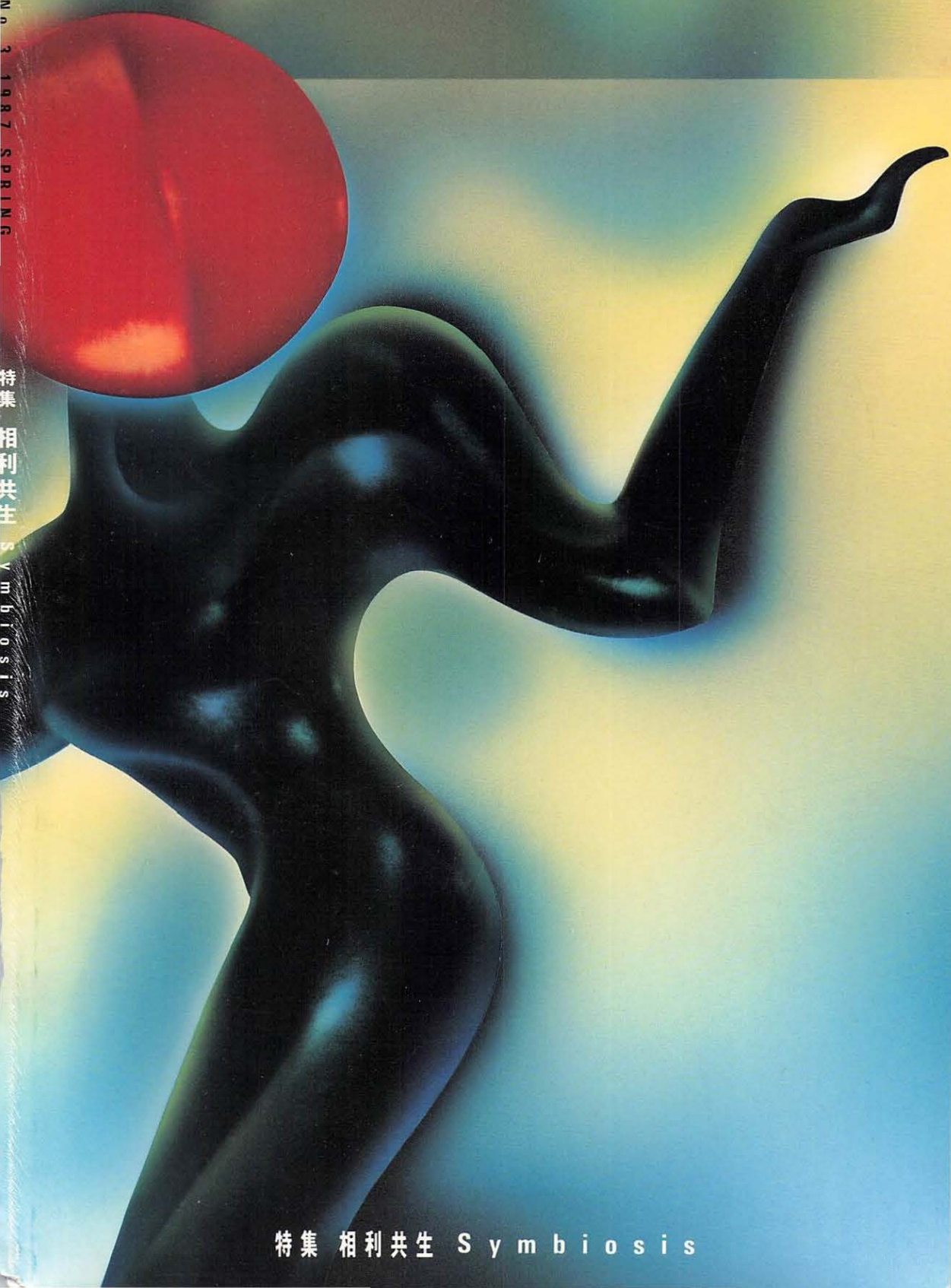
# ERGODESIGN

Vol. 2 No. 3 1987 Spring

異領域の知見が集積する研究誌

ERGODESIGN  
Vol. 2 No. 3 1987 Spring

特集  
相利共生  
Symbiosis



特集 相利共生 Symbiosis